



スペインに憧れて



新保 章

何時の間にかスペインに憧れていました。一つはアルハンブラ宮殿に憧れて。

「アルハンブラ宮殿の思い出」タルレガ作曲のギターの名曲です。この曲が弾きたくて何時の間にか僕もギターを手にしていました。トレモロの合間に見え隠れするまだ見たこともない宮殿への思いは、自分が思う以上に大きくなっていました。

もう一つは、エル・グレコに出会いに。独特のタッチでキリストや12使徒たちを描く中世のギリシャ人。その人の絵に何時の間にか魅入られていました。傑作と呼ばれる作品の前に立つために。そうして、その人が住んでいた街並みを自分の足で歩いてみるために、スペインという響きに呼ばれました。

そうして、最後に、アントニオ・ガウディーの建築を見るために。写真やテレビで眺めた青い空に映えるサグラダ・ファミリアは、まぶたの裏に焼きつくだけの印象を僕に残していたのです。
そうして急に思い立ったように旅立ったスペインは、想像以上の印象で僕を迎えてくれました。

人は旅の思い出をどんな風に記憶するのでしょうか。ある人は写真に、ある人は絵に。ある人は日記の断片として。そうして僕は、スペイン滞在中のメモを詩に換えて。憧れだったスペイン旅行の詩のアルバムです。

飛行機に座って

飛行機に座って

飛行機の 小さな窓から
差し込んでくる 西日が
褐色の肌を 柔らかく燃え立たせている
金色に 光る産毛は
すすきの原の ようにも見えて
僕は少し 郷愁にかられて

どれぐらいの 旅立ちが今日も
この場所に あったことだろう
異国の人も 同国の人も
青い目も 黒い髪も 透けるような肌も
たくさんの 目線と言葉とは入り乱れ
それぞれの 土地へと
遠い距離を 運ばれていく

交わることのない 人々の運命には
それぞれが 無関心なまま
きっと シートベルトを締めたかどうか
もう一度 確認したりして
そうして僕も 初めての地に運ばれていこう

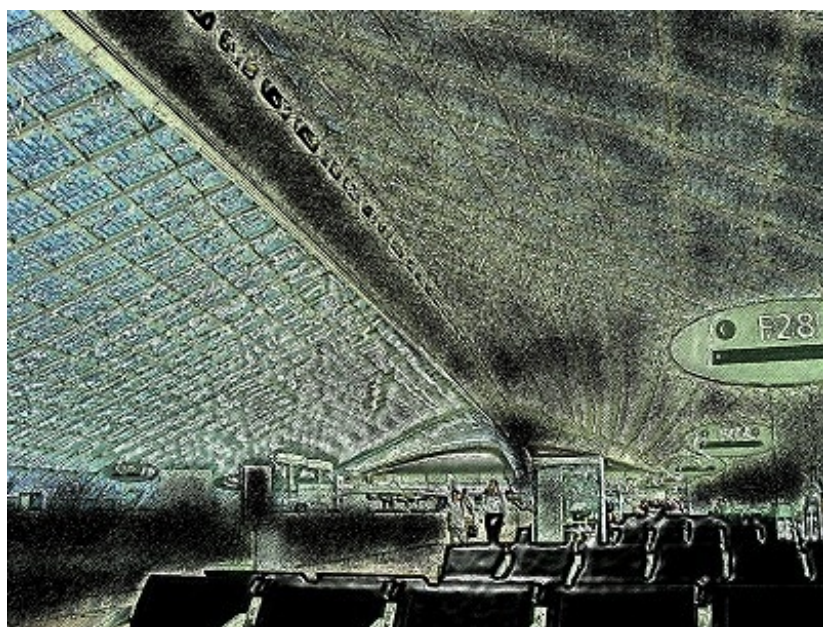
別れゆく定めの人々の寂しさが
胸の半分を 満たしてしまっただけ
半分はまだ 見ず知らずの土地の
新しい風景へと 心躍らせて

僕の背中を
天空の頂に 突き落とすように
飛行機のエンジンが 咆哮をあげる
けれどそれは どこか寂しげな
遠吠えのようにも 聞こえた

きっと飛行機の 丸い鼻先も
泣いているように
赤く 濡れているに違いない

*

スペインの最初の訪問地はマドリッド。直行便がないとのことでパリのシャルル・ド・ゴール空港を経由しました。マドリッド行きの飛行機に乗り込み離陸の時間となったのですが、なかなか動き出しません。しばらくすると機体に異常がありとのアナウンス。だいぶ待たされるはめになりました。



ぼんやりと斜め前を眺めていたら、飛行機の小さな窓から淡い夕日が差し込んで、スペインの女性でしょうか、その腕が淡い金色に染まっています。そうしてその横顔に目を上げると、「この人は一体どこに行くのだろう」「そうしてどんな生活を送っているのだろう」と、そんな思いが頭を過ぎり、時として交わることなく別れ行く人の定めが、少し寂しく思われました。

飛行場。人々が行き違う場所は、それだけ多くの別れを予感させるのでしょうか。地上から離れて行く時の飛行機の強引な力。それに抵抗するようにシートに押し付けられる背中を乗せて。人と人とはそれぐらいの強さがなければ未練なく引き離すことができないのかも知れません。きっと飛行機もその役目に耐えながら、西日を浴びて泣き濡れていたのではと思いました。

日曜のお昼に

日曜のお昼に

日曜のお昼に

嗚呼12時の 鐘が甘く響いている
ゆっくりとした 日曜のまどろみの上にも
窓辺からの 明るい日差しが
顔の上に 届こうとする

そろそろ 赤い花の飾られた
まぶしい テラスにも
窓を開けた人々が 顔をならべて
ゆっくりと表の気配に 触れてみるころ

石畳を我が物顔に 転げまわっていた陽射しは
人々に主役を 譲るため
動くことを すっかりとやめた
それを いぶかしく思ったのか
小犬が地面に向けて ひとしきり吼えている

空を キャンパスに見立て
飛行機が 白い文字の書き込みを入れる
それは 誰に当てたメッセージ

「日曜日のお昼を ゆっくりとお楽しみください」とか
きっとそんな 悠長な言葉を
なぞっているんだと思える 空から落ちそうな速度
眠りから覚めたばかりの 目にはけど
少し 読みにくいかも知れない

僕は 午前中に見た
絵の印象を 消化することに精一杯で
まだ朝の すがすがしい気配を残す
黄色の風に 吹かれたまま
こんな穏やかな 日曜の昼下がりに
少しむっとりとした 顔をしているから

テラスの椅子で コーヒーの温かな
湯気のぬくもりを 楽しむ
心のゆとりを 感じられないままで

*

最初の滞在地となったマドリッドではオプションの市内観光に参加しました。憧れのエル・グレコの作品に出会うことができるプラド美術館がそのコースの中に入っていたからです。オプションには結構な人数が参加していました。



最初にドン・キホーテとセバスチャンの銅像があるスペイン広場を訪れ、その後、プラド美術館へ。2時間ぐらいの時間があつたので結構いろいろな絵が見れるなと思っていたのですが、さすがはプラド美術館。展示作品の数も多く、お目当ての作品を見るためには、他の作品は小走りで通り過ぎるはめとなりました。エル・グレコ以外にもゴヤやベラスケスの作品も充実しており、すっかりと高揚した気分の2時間でした。その後、再びバスにのり王宮を見学。そうして最後に案内された場所が何と免税店。皮の製品でいいものがあるとのこと。

けれど旅行もまだ初日の観光が始まったばかり。お土産にもあまり興味がなかったので、お店の中をさっと見回した後、お店の前の小さな広場のような場所で

一人日向ぼっこをしていました。

近くのアパートの窓はどれもまだ固く閉じられたまま。通りには人もまばらで、時折犬を連れた人が通りすぎるぐらい。買い物のためにさかれた時間は30分ということだったのですが、それ以上にゆっくりと感じられました。

僕はさっきプラド美術館で見た絵のことを考えたりしながら、少し堅苦しい顔で考え事などもしていたのですが、なかなか目覚めようとはしない家々のテラスを眺めていたら、せっかくの日曜のお昼時を楽しむ余裕もないなんて、もったいないなど、飛行機が白い雲を曳いていく空を見上げて思っていました。

トレドにて

トレドにて

○大聖堂で

祈りの言葉は いつも静謐な暗闇に
静かに 頭もたげる
祈りは 祈りの言葉を呼び
それは天井支える 柱のしみとなって
訪れる人々の 耳元に語りかけてくる
そのささやきに人々も 応えずにはいられない

祈りを天へ 届けようとする
小さな翼の天使達が 目指す先には
ステンドグラスの 光あふれた
祝福された場所

やがて 許しの場所を過ぎて
聖母の 白き胸に抱かれた祈りは
幼子のような 甘い夢を見て眠る

地上から尖塔を 見上げるだけの
どこか すすけた顔の僕を
暗闇の いたるところから
見つめている 深き眼差し

僕のすべてを 見通している
振り向けば すぐそこに
その人が いるようで
声にならない祈りに 僕も誘われている

○小さな広場で

金色の 髪の子供が
赤茶けた 陽射しに
愛さずには いられない
あどけない 笑いをする

さっきオリーブの木陰で
悪戯に僕を覗き込んでいた 天使の姿のようだ

地面に落ちた まだ新しく白い羽根は
僕に見つかって 彼が
慌てて 落としたもの

銀色に光る 葉っぱ揺らすオリーブに
慌て者の羽根を 僕は差しておいた
きっと後から 彼が捜しにくるだろうと思って
今 僕の頬に口付けして通り過ぎた風は
きっと 天使のお礼だったに違いない と

○街角で

磨り減った 黄色い石畳の上を
何万の足が 通り過ぎていったことだろう
喜びや懊悩を 松明のように
頭に 点らせながら

その人たちも 今はいない
白い壁に 浮かび上がるしみは
消えないままの 悔恨なのか

日陰になった道の 先の方では
太陽の 匂いがしている
その道の奥からは 大聖堂で僕を見つめていた
その人の呼ぶ声が 響いているようで

呼ばれるがままに 僕は
細い通りを 歩いて抜ける
するとまた その奥の方で
僕を呼ぶ 新しい声

幾筋もの細い道は その人へと続く道
日陰になった道も
きっと その人へと続く道

街角ごとに 呼ばれるがままに
僕は 歩み続ける
さらさらとした 茶褐色の風に
背中を 押されながら

*

市内観光の後、古都トレドへのオプションツアーに参加しました。トレドはマドリッドから車で一時間程のところがありました。ここは画家エル・グレコの住んだ街。一度は訪ねて見たいと思っていた場所です。

旧市街に足を踏み入れるとそこは昔の面影を残したままの場所。土色の壁の家に挟まれた細い道が複雑に入り組んで、迷路のような雰囲気を感じました。陰になった暗がりから突然明るい場所に出た時の、ちょっと不思議な感覚。それがあまりにも予期できない突然の出来事なので、なおさらのことでした。

トレドにはスペインカトリックの総本山たる大聖堂があり、当然そこも観光コースに入っていたのですが、中に入ると外のまぶしさが嘘のように、静かな暗がり支配しています。ステンドグラスが色づける陽射しのほのかな明るみの中で、幾年も続く祈りの言葉を染み込ませた壁や柱からは、言葉なき祈りが耳に響いてくるような錯覚を感じていました。

大聖堂を出ると外はまた明るい太陽に支配された世界。大聖堂の前の広場には小さな子供が無邪気に追いかけてっこをしていました。その表情は絵画でよく見かける小さな天使を思い起こさせました。

大聖堂の周りには鳩が飛び回っていたせいでしょう。白い羽根がところどころで落ちていたのですが、それが天使のものだったらどんなにか面白いのにと他愛のない空想にふけていました。



やがて、古いままの街並みにも少しなれ、風景に溶け込みながら歩いているうちに、グレコもこの道を歩いたことがあるのだろうか。そうしてその脳裏には、どんな思いが浮かんでいたのだろうと、憧れの人の胸のうちに思いを馳せていました。

乾いた大地の印象に

乾いた大地の印象に

赤茶けた 地平線は
空の肌の下に隠された 血と肉の色
赤茶けた風が 血脈を走り
熱いたぎりを 伝えている

麦の刈り後を 焦がしていた太陽が
砂地に植えられた オリーブにまわりついて
空に投げ返される 銀色の悲鳴に

表皮を厚くする サボテンは
悟られぬように 空の色から掠め取った
水色の果肉を 潤わせている

湿り勝ちの 僕のか細い歌声では
響くこともできない 赤い大地
野太い叫びだけが
乾いた荒野を 荒々しい獣のように走り

少しの 草地の上には
太陽への生贄に
ゆっくりと 尻尾動かす
茶色の牛の群れ
なんの手向けの 花束も無いその先には

レンガ作りの 黄色の家々が
煙突を 長く伸ばしている
風のを 探るため
天空に突き刺した 鈍く光る骨
送電線の黒い電線が 震えた神経の束として

オリーブの 木の間から
白い鳩が 空に飛び立って行ったのは
大地がしたためた
つぶされた喉の メッセージ

吹かれる風に すべてが乾いた砂に
帰っていかうとする 赤い肌の上にも
言葉を発し やめようとしなない 灼熱の命の

*

マドリッドからトレドに向かう車中。あるいは、スペインの新幹線たるAVEでコルドバに向かう途中、荒涼として赤茶けた大地を通り過ぎました。普段の僕にはあまり馴染みのないその風景がとても印象的で、自然にちょっと大げさな言葉が浮かんできました。



乾燥した地平を眺めながら、こんな風景を心象風景に持ったら、物の感じ方や考え方も変わるだろうと、そんな漠としたことを考えていました。日本から来た僕の声はきっとどこかウエットで、この大地の上では直ぐに乾いてしまうのではと、そんなことも感じていました。

身の回りの自然が暮らしに与える影響は大きく、その違いが同じ人と人とを、遠く隔ててしまうこともあるとは思いますが。

それでも一生懸命に生きようとする命の煌きはどんな場所でもきっと同じ。そしてその煌きに応えるように自然はその土地ならではの豊かな贈り物を与えてくれたます。例えば銀色の陽射しを照り返していた、たくさんのオリーブの木のように。

砂漠の夢に

砂漠の夢に

砂漠の砂を 粉々に噛み砕こうとする
今日も 青空の底には
黄色い太陽が 浮かんでいる

風が 砂で描く模様は
見慣れてしまった ものばかり
毎日毎日 描き続けて
さすがの 絵描きも
アイデアを 枯らしてしまった

今日も 頭の上から離れない
黄色の呪いから 免れて
ひんやりとした 暗闇の王宮に
ハッシシの紫の煙が 中空を
夢遊病者のような手つきで 漂う頃

夢は長い渡り廊下の 暗がりを抜けて
林のようにそびえる 柱の合間から
青くなった 姿でやってくる

砂漠の中で見る 乾いた昼の夢には
蠅の羽音が いつまでも響いたままでいる
それは 砂漠の蜃気楼の向こう

青い青いオアシスへの 忘れがたき思いのように
耳の中で 日長物憂く流れている
消えることなき 水之音

皮膚呼吸を いがらっぽく苦しくさせる
砂埃の 物憂い記憶を
忘れようとする 水煙草の時間も

僕の目の中に 一瞬に消えて行った幻想
すべては 黄色の砂の一粒に
影も残さず 消えていくだけの

*

コルドバに立ち寄った際に、メスキータを訪れました。メスキータ。もとはイスラムのモスク。ほの暗いその内部はアーチ状の円柱が何本も立ち並ぶ円柱の森。もっとも後にはカトリック教徒により、多くを改修されてしまい、建設当時の姿はとどめていないそうです。

まぶしい太陽の下から足を踏み入れたメスキータは、ひんやりとした暗闇の世界。外の熱気が肌を焼くばかりだったので、そのギャップに少し驚いてしまいます。

少し歩いていると、メスキータを建築した人たちの思いが僕に触れようとしたのでしょうか。行ったこともない砂漠のイメージが自分の中に膨らみました。そのイメージは明かり窓から差し込む陽射しに、すぐに焼き尽くされて消えたのですが、その余韻だけはかすかに胸に残り、消えそうなものを言葉に写しとりたくて、僕は急いでペンを取りました。



修道院の中庭に

修道院の中庭に

○夕刻に

この修道院の中庭に

ゆっくりと 休みに来た夕日

さあ 僕と一緒にここで休もう

僕も一人 この土地に来て

言葉交わす者を 求めたりもするから

おまえも そんな風に

誰かに 話しかけたくなっただろう

レモンの木陰に座る僕に

どこかすっぱい 後味が残っているのは

レモンの果実の ほとばしる酸味

それとも僕の胸から 染み出してくる

生を巡るものの 糸の切れたような寂しさ

繁った葉の間から見る

教会の尖塔は 夕日が休む憩いの場

鳩がゆっくりと 毛づくろいをする時間

屋根の隙間には 乾いた夏草が

枯れ果てたままの姿で 横たわっている

回廊の真ん中には すり減った噴水

どれだけの水が 流れていったのか

輪郭をすっかりと 丸くしている彫刻の上に

光ながら 巡ることをやめない透明な水

さるすべりが 昼の名残に

むらさきの花を 咲かせている

このベンチに座り 夕日以外にも

何かを訪れはしないかと 待っている僕に

優しく肯う風が 寄り添い
さあ もう歩き出すようにと伝える
すべての苦しみを そのしわの奥に刻み込んで
輝かしく笑う 修道院の老女のように
その優しい 励ましの手のひらに
僕はまた 少し歩き出す足の力を覚えてみる

○夜に

中庭から見る 四角い空を
覆い隠すように 星は輝き
毎日 挨拶を重ねるその顔は
遠い異国に 誰よりも親しく
僕の胸に 飛び込んでくるもの

もう祈りの声も 程よい疲れに
寝静まってしまう頃の
少し冷たい 夜のとばりが
肩を 小刻みに震えさせようとするから

最後のランプも 消えて
人々の寝静まった 中庭に一人
どこからか聞こえてくる 最後の鐘は
鼓膜を揺らし 心地よく響く
光に濡れた音色は 星の間を渡ってきたから

僕の物思いは きっと僕の物思いの先には行けない
星屑の間を 巡るすべを知らず
小さな胸に 消えていく
今日の僕の 静かなあきらめ

言葉なき憧れは やがて星屑に変わって
星々の間から 砂時計のように
こぼれ落ちる こともあるだろうか
すべては 静かにささやく
星の胸の 秘め事

*

グラナダの宿泊先は昔の修道院を改修したパラドールというスペイン特有の国営ホテルでした。四角い回廊に囲まれた中庭には小さなベンチがあり、少し時間もあったので、腰を下ろすと、何も考えず、枯れた夏草の生えた屋根や紫の百日紅の木を眺めていました。時々少しの夕日を含んだとても優しい風が吹いてきて、僕の背中をいたわる様にさすってくれました。それは触れたこともない、修道院の優しい老女の手のひらのように思われて、自然と素直になる自分がいました。



それから街へでて時間をつぶし、夜の12時ぐらいにホテルに着いたのですが、フラメンコを見て興奮したせいでしょう。疲れているはずなのに眠くはありません。

まだ中庭に出れる状態でしたので、頭の火照りを鎮めようと、再びベンチに座りくつろぎました。空には日本でも見慣れた星が瞬いています。僕は懐かしい友人にでも会ったような心持になり、その星に無言の言葉で語りかけていました。

オリーブ畑の道に

オリーブ畑の道に

○オリーブ油のパンに

一面が銀色の 陽射しを照り返す
オリーブの葉は この土地の風の色
洗いたてた 洗濯物のように
真っ白な家の壁を 楽しそうに駆けていく

絞りたての オリーブの油
固いパンの 一切れにつけて
少し乾いた唾液の中に 押し込んでみると
芳醇な香り濃厚な味は パンをご馳走に変える

きっとオリーブは人生に
深い 慰めを与えてくれる
天から贈られた 金色の一滴

それぞれの 大地の上にはきっと
天から 与えられるものがあり
それを素直に楽しみ 大切にする人々の
笑顔は とても明るい

その笑い声に 触れているだけで
僕の中にも 何か大切なもの
芽吹く ような気がして
この土地の人々との 語らいを楽しんでいた

○壊れそうな白い家に

オリーブ畑の大地に
崩れそうになっている 真っ白な家
その中を 乾いた風が通り過ぎて行く

どんな強い 陽射しが
お前の白い 肌を焦がしたの
枯れ草よりも 弱々しげな
ひび割れの 細い壁
青空を支える 力を無くし
大地にひれ伏す 黄色の屋根

一つの風景に 取り込まれてしまい
もう息づくこともやめた 白い家
どんな幸福や悲しみが その中に休んでいたの

今は その面影さえも
隠れるところない 白い家から
逃げ出してしまい

生まれた姿の 石くずへ
戻って行くためだけに
時間を費やす 白い家

物言わぬものたちを
優しく 抱きかかえる
この大地の 甘い眠りに
かろうじて起立している 白い家

○バスの中で

僕はすっかりと
自分に降り注ぐ 陽射しに満足をして
白い大理石の 彫刻を真似る

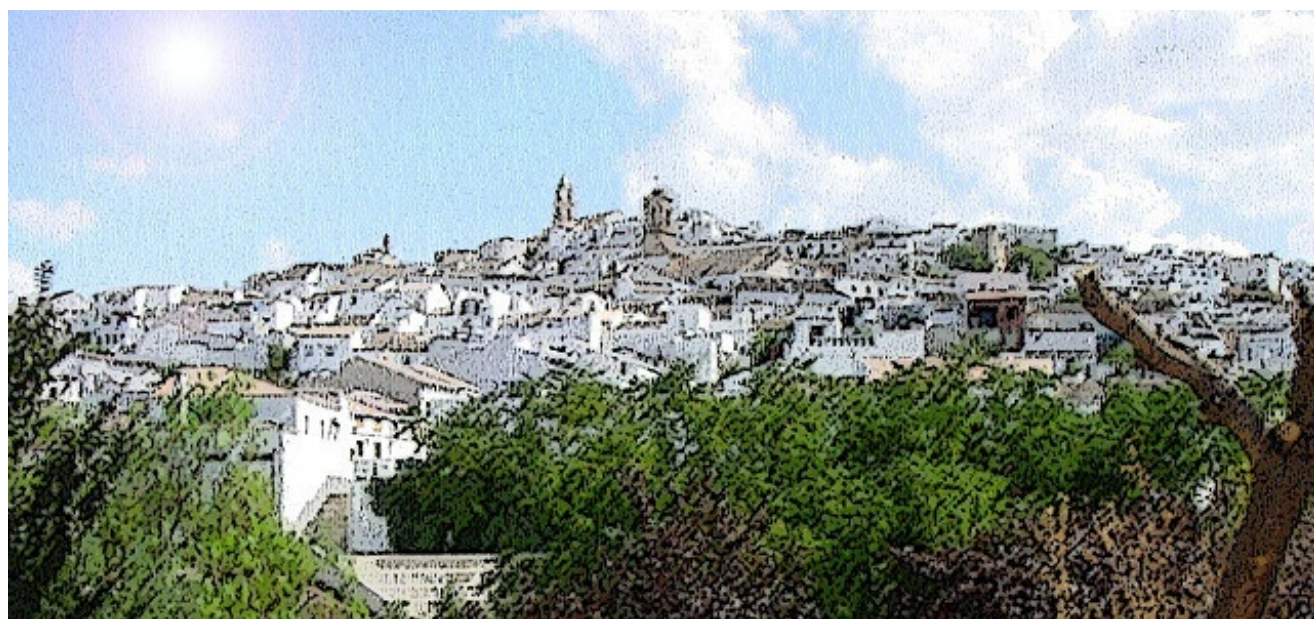
軽い微笑に 目をつむる
光に包まれた 宝石のような思いを抱いて
青い海の底に 満足げに下りていく
地中海の静かな 時間を眠りに

僕の姿を眺めた風も
随分と甘く なるに違いない

*

グラナダへ行くまでのバスの車中、世界で一番というオリーブの産地を通り過ぎたのですが、とにかく一面がオリーブの木。そんな風景が一時間以上続き、世界一の凄さにただ、圧倒されるばかりでした。

その土地にはその土地の豊かさが、人々の生活を潤してくれます。熱く乾いたこの大地に天はオリーブを与え、その贈り物を大切にす人々の暮らしがあります。



途中、ドライブインのような場所でバスが止まり、オリーブ油を始めとした各種オリーブの製品を販売していました。試食ということでオリーブオイルをつけたパンを食べさせてもらったのですが、それがとても美味しく、考える間もなく、自分用のお土産にとオリーブオイル一瓶を買い求めました。

オリーブの木々の間から眺めていると、もう人が住んでいる気配の無い廃墟が強い日差しに焼かれていました。けれどそれが不思議と痛々しい感じもせず、大地に帰って行くのを待っているという風情でした。

アルハンブラ宮殿にて

アルハンブラ宮殿にて

長い年月に すっかりと赤く
夕日に 染まって輪郭を柔らかくした城
昔日の 高ぶる火照りも
土の壁に 厚く塗りこめられてしまい
静かな憧れだけが 精緻な模様の上
今も 漣のように震えている

熱風吹き上げる 砂漠の昼の
喉を焼く渴き 癒されぬ時間も
疲れたラクダの 涙を拭った檻樓も
すべては青い空の下に 忘れられた記憶
四角い中庭の 切り取られた空だけが
奥の方で キラキラと光り
その消息を 伝えている

オアシスに ありたいと思う
それはかなわぬ 願いだと
人は知っているはずなのに
雪解けの 尽きない水に守られた
潤う大地を巡る 星と月の幻想

どれぐらいの穏やかな 日差しが
高い窓から 部屋をほの明かりに照らし
涼しい風の夜は 騒ぐことなく
巡って行ったことだろう

ライオンの彫刻の背中
光りながら湧き出ている 水の音
その快い物音が
耳元に 届かなくなることなど
決して ないはずだった
噴水の面には 昔と変わらぬ姿の塔が
風に優しく 触れられていた

*

僕は 真昼の夢を見ていた
僕の走る 足音に合わせて
深い森の中を 強い日差しが差し込んでくる

湿った 苔のにおいを
肺一杯の ご馳走に変えたと
やがて木陰に 静かな水の音が響いていく

僕の喉を 潤す小さな水路
そこに頭をつけるように
若い緑のしだが 冷たい流れに光っている

僕は 薫り高いジャスミンの花
たくさん 摘んだ籠を
その瀬音の祝福に 捧げていた
小さな 儀式のように
水面を運ばれていく 白い花

澄んだ湧き水の上に 陽がこぼれている
水の透明な流れと光とが 幾重にも重なり
小さな 影を織りなしている
尽きることのない 祈りの手
憧れは 夢見たままに ここにあると

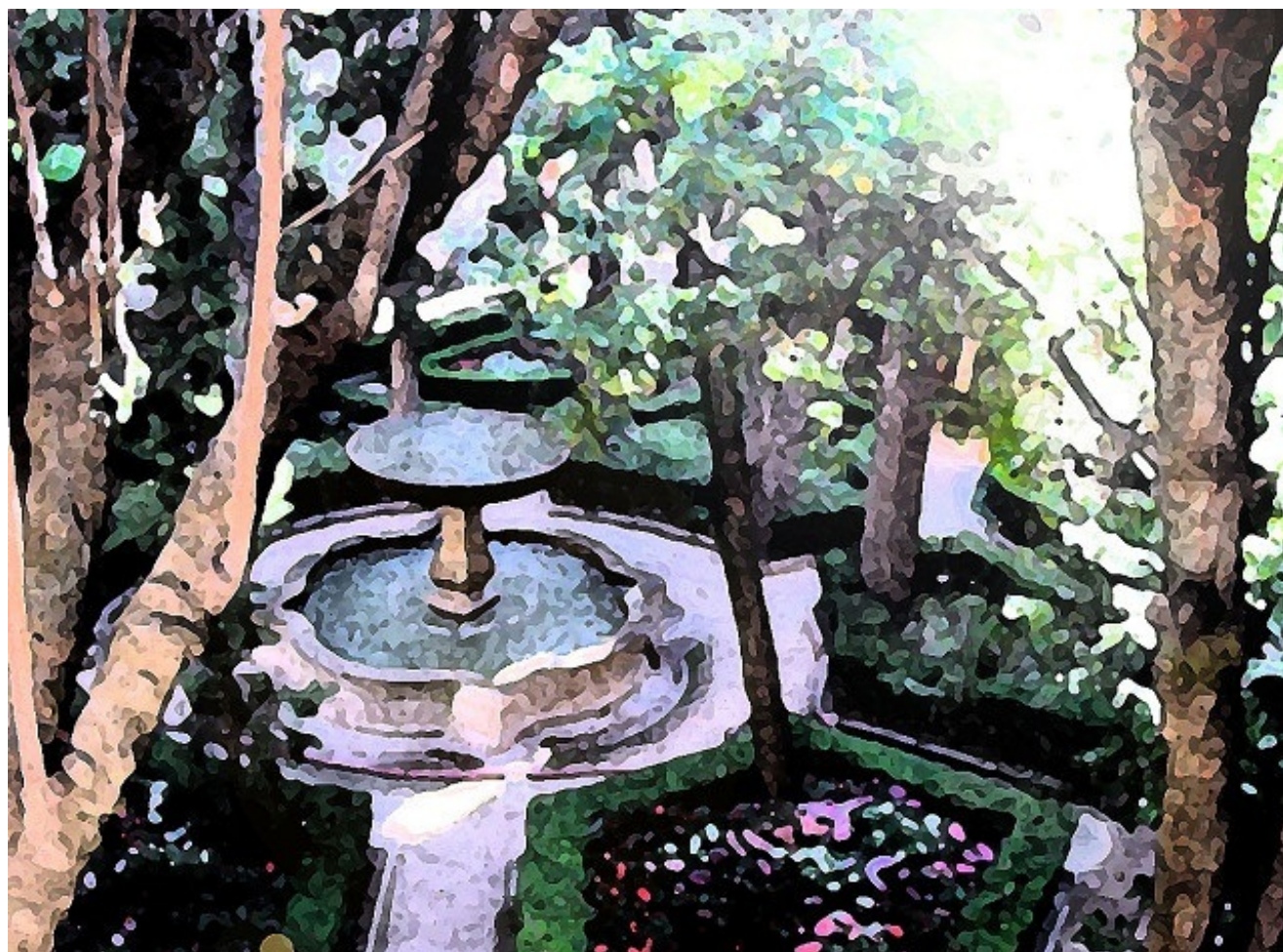
*

グラナダにあるアルハンブラ宮殿。イスラム芸術の輝かしい結晶です。僕の心を震わせ、ギターを弾き始めるきっかけをくれた「アルハンブラ宮殿の思い出」もこの場所の印象を音にしたものです。自分を誘い入れてくれたその憧れの場所に、自分がほんとうに立っていることが、少し不思議に思われました。

宮殿に入ると精緻な作りの王宮や寝室、中庭などが僕を迎えてくれました。印象的だったのは何匹ものライオンに支えられた噴水。尽きることなく水が流れていました。

後で聞いた話ではこの土地は雨が少なく乾いているものの、雪解け水が豊富なそうです。

王宮の城外には水しぶきの上がる美しいイスラム庭園があったのですが、ここでも滾々と湧く透明な水の静けさがとても印象的でした。その尽きない水はこの乾いた土地の人々にどれだけの豊かなめぐみだったのでしょうか。オアシスという響きが僕の中でしばらく震えていました。



白い街にて

白い街にて

白い壁の家々の部屋 通り抜けて
天使の羽根のように 軽やかになる風は
遠くに見える 青い地中海と
僕との間を 行ったり来たりしている

僕の手には すぐに歩けてしまう
小さな街の地図と 二枚の絵葉書
たくさんの 華やかな
お土産屋を巡り 選んだ風景の
白い街の匂いを そのままに届けたくて

白い教会を 背中に
地中海の 青さも目に飛び込んでくるから
何か 気のきいた言葉も浮かぶような気がして
握り締めたペンの先から 言葉を書き出してみると
すぐに 埋め尽くされていく白い余白

その後には 切手を貼って
ポストに 投函しようと思うけど
異国に覚える遠い距離の 心細さ
思い伝えようとする たくさんの手紙の中で
僕の葉書なんか どこかに紛れてしまいそうで

今すぐに この絵葉書に羽根が生え
僕の刻んだ言葉が
そのまま 地中海を渡り
飛んで行って くれればいいのに

ブーゲンベリアの咲いた 白い通りを
僕は絵葉書を手に携えて 歩いていった
その上の文字が 僕の胸の中でどんとどんと
熱くなるのを 感じながら



*

バスで移動の途中、ミハスという小さな町に立ち寄りました。地中海にお似合いの白い壁が肩寄せあう町。お土産を買うための一時間程度の休憩でした。僕は何かを買うつもりもなく、小さな町のことですから散策もすぐに終わり、地中海を望むベンチに腰を降ろして風に吹かれていました。手持ちぶさただったので、真新しい絵葉書を取り出し言葉で埋めていったのですが、葉書でしか今の気持ちを伝えられないと思うと、どこかもどかしくなり、この葉書に羽根があって、日本まで飛んでいけば便利なのにと、勝手なことを考えていました。

普段の生活で携帯電話やEメールに慣れきってしまったから、そんな発想が浮んだのでしょうか。文明病です。絵葉書には絵葉書なりに、思いがけなくポストに舞い込んでいたら、どんな顔をして喜んでくれるだろうと、そんなことを想像できる楽しさがあります。

地中海に遊び

地中海に遊び

白い家々が 半島に貝殻のように住みついている
海からは 宝石に色づいた波が
見るものの時間を 忘れさせてくれる

たくさんのかもめを連れた 白い船が
どこか自慢げな様子で 通り過ぎる

やしの葉で編んだ 傘の下で
夕刻の穏やかな 潮風を浴び
僕は少し 眠ろうと思う
さんごの夢に 彩られながら

やがて人の いなくった砂浜の傘
片付けに 人がやってくるころ
近くの酒屋ではそれから
楽しい 夜が始まる

陽気な笑いが響く 長い長い夜
海は海で 月を面に捉え
飽きることもなく

*

砂浜に落ちた 珊瑚の形見
かもめと供に 空にあった白い羽
どれもが僕の足に 踏まれて
小さな 悲鳴を立てていた

そんな僕の足の力
砂に食い込む足の名残
息を切らし 僕は走り
砂浜を 僕の足跡だらけに傷つける

そんな小さな抵抗も 毎日の出来事
海は柔らかな 波の舌で
砂浜を整え 朝日を迎えるのだろうか

*

波と 追いかけあう戯れは
童心の僕の心を 呼び戻す

背中を 落ちかけの夕日が 軽く焼いて
そこに染み込む 潮風に
背中には羽が 生えたように軽く
どこまでも 遠くへ歩き出したくなる

金色の 砂金のような陽射しは
波の届くところを頂に 僕に押し寄せて
僕は その波めがけて手を伸ばす
手のひらの中に 金色のものが
つかめる事を信じながら

幼心の幻想に 溢れている海は
懐かしい玩具に飾られた 揺りかごのように

*

Isn't it nice!

と 砂浜に残された文字
素直な言葉だな

いつの間にか気持ちのいい潮風に
Tシャツを脱がされて
そうだね
確かに僕も そう思うよ

*

たくさんの夜と たくさんの朝を飲み込んで
甘くなった波が 白い泡を吐きながら向かってくる

歯を立て そんな怖い顔をして
その奥のほうでは 慈悲深い光がキラキラ
輝いて見えるから ちっとも怖くはないよ
波の上のヨットを 優しくあやしているのも君だし

僕もこれから 年を重ねていけば
君のように 甘い色彩を身にまとうことが
できるのだろうか
言葉の奥底には いつでも
優しいものを 光らせながら

*

寂しい 灯台のように
海の中に伸びていく 僕の黒い影
それが ほんとうの僕の姿のように見えてきて
僕は海の中ゆれる 海草のような存在なのか

誰かに 抱きしめていてもらわなければ
僕はそのまま 海深く
飲み込まれてしまいそうになる

*

ポセイドンのトライデントに
従順な海が吐き出す 小さなかけら
こわれた貝の 茶色の縞模様も
きっと神が この海のために定めた色彩

神に守られてあることの 平穏な海に
足を波に洗ったまま 抱き合えれば
足元にはいつでも 光彩が集いきて
波音が 声高に叫ぶ雑音を
綺麗に 打ち消してくれるから
僕らは 胸の内の
甘い高ぶりだけに 心臓を素直に高鳴らせ
終わらない 夢を見ていよう
ポセイドンが死に絶えるよりも 長い長い時間の

*

フェンヒーローラというコスタ・デル・ソル沿いの町を訪れました。宿泊したホテルの目の前は地中海。まだ海水浴も楽しめるとのこと。そんなことは少しも想定していなかったので水着もなかったのですが、海だけでも見ておくかと、ジーンズ姿で砂浜に歩いて行きました。砂浜には椰子で編んだビーチパラソルがあり、体を横たえられる椅子が置いてあります。

座って海でも眺めようと腰を下ろしたのですが、海を見ているうちに波に触れてみたくなり、波打ち際まで歩き手をつけると、とても快い感触。ついには靴を脱ぎ、ジーンズを捲り上げて海に入ると、最後は着ていたTシャツを脱いで上半身裸になっている自分がいました。

車や電車の車窓から通り過ぎる海を見た記憶はあるのですが、自分の肌で実際に触れたのは、もう何年ぶりかのこと。海が温かだったからでしょう。足を浸けていることが快く、日が傾き初め周りが帰り支度をしているのに、このままもうしばらくいたいと思っていました。



きっとホテルの窓から眺めていただけでは、詩の言葉は湧いてこなかったのでしょうか。足に触れた波が僕にくれた、ささやかな贈り物だったのでしょうか。

ロンダにて

ロンダにて

羽一杯に 風はらませた燕が
空高いところから 滑り落ちてくる
山の上に孤立した 要塞の町

下からは 息を切らし
青く涼しい 朝の風が
さらなる空の高み 目指そうと
僕の髪 頼みもしないのかき上げる

平衡感覚 狂わせる坂道の多さ
息を苦しくさせる 細い道は
迷ってしまいそうな 袋小路
けれど諍いの 荒々しい声は聞こえずに

敵を追い払う 役目から解放されて
緊張感なくした
柔らかな 陽射し受ける城壁
黄色い壁の教会 白い壁の家々

町外れ 市内への門が迎える者は
凱旋の 傷ついた戦士ではない
優しい笑顔の 人の群れ
それに寄り添う 穏やかな気持ち

どこもかしこも 優しくなってしまった町に
刻まれた 痛い記憶も
癒され 風の中の化石に
なってしまったに 違いない

*

ロンダは溪谷の上に孤立した町です。ロンダは英語のroundの意味だそうで、360度の見晴らしを保つ地形をうまく言い表わしています。天然の要塞としての役割があったという話しにもうなずけます。

坂道の多い町は歩きにくかったのですが、白い壁の家や黄色い壁の教会など、昔の素朴な面影が見る目を楽しませてくれました。観光客も随分と訪れていた様子。ドイツ語やフランス語といった聞きなれない言葉が飛び交っていました。



この町の歴史を飾った争いの傷を癒すのは、きっとこんな穏やかな毎日と人々の笑い声なんだろうと思っていました。

天空の人に

天空の人に

あなたは どれだけの民の瞳に
眺め続けられ 来たのだろう

紺青の夜と 千の目をもつ天使を従え
禍々しい顔をした 異形の者たちは
大地に 平伏させ
明るい星々を 衣服とまとい
天空の真中にあり続ける 静かな沈黙

僕らの懺悔を
肯うでもなく 断ずるでもなく
ただそのままに 見つめている人

瞬きもしない その瞳に
見つめ 続けられることは美しい
一つの 恐れでもあり
心震わす程の 喜びでもあり

悲しいため息 途切れがちの祈りの言葉は
夜を吹く 風となり
あなたのまわりに 集まってくる

その風を彼の地へと 届かせようとするかのように
天へ向けた指先を 輝やかせている人

虚空に映る 人智を越えた者の影に
夜はどれだけ 柔らかく守られたものに
姿を変えたのだろう

いつまでも 空にあって身じろぎもしないあなたに
寒気のような身震いととも
消えない信頼を 僕も思っている

*

バルセロナではカタルーニャ美術館を訪ねました。バルセロナ・オリンピックでも有名なモンジュイックの丘の一角。世界有数の中世キリスト教美術のコレクションで知られています。その近くにはミロの美術館もあります。

美術館に展示されていた素晴らしい作品の数々。特に感動したのは11～13世紀のカタロニヤ地方の教会の壁画をそのまま移設してきたコーナー。実際に教会にいるような錯覚にとらわれました。壁画の中央には大きなキリストが描かれていたのですが、その神の子にどんな思いで、中世の人々は向かい合っていたのだろうと考えていました。手の届かない天空の者への憧れと、人を簡単に滅ぼすことのできる力ある者への恐れ。



敬いの気持ちと恐れのお気持ちとが同時に自分の中に降りてきて、初めて畏敬という気持ちが、理解できた瞬間でした。

その人の血に

その人の血に

空に消えていった 祈りの言葉
風に奪われた 大地の暑さ
地中海に差し込む 太陽の眩さ
市場に積まれた 野菜や肉の匂い
人々の生活の 楽しみや悩みも

たくさんのものが その人の血に
流れ込んでいった
少女の夢よりも 夢見て
そのときを誰よりも じっと待って
やがてその人の血に 熟成して花開くようにと

大きく花開く その華やかな匂いには
たくさんの植物や
生き物が誘われ 集まった
その花の中に 一緒に夢見ることを願って

とうもろこし とかげ 椰子の木々
麦の穂 地中海の貝殻
森のきのこ カタツムリも

花そのものの その人の
金色の心臓に 甘く波打ち
何もない空間に たくさんの形象の夢を見た

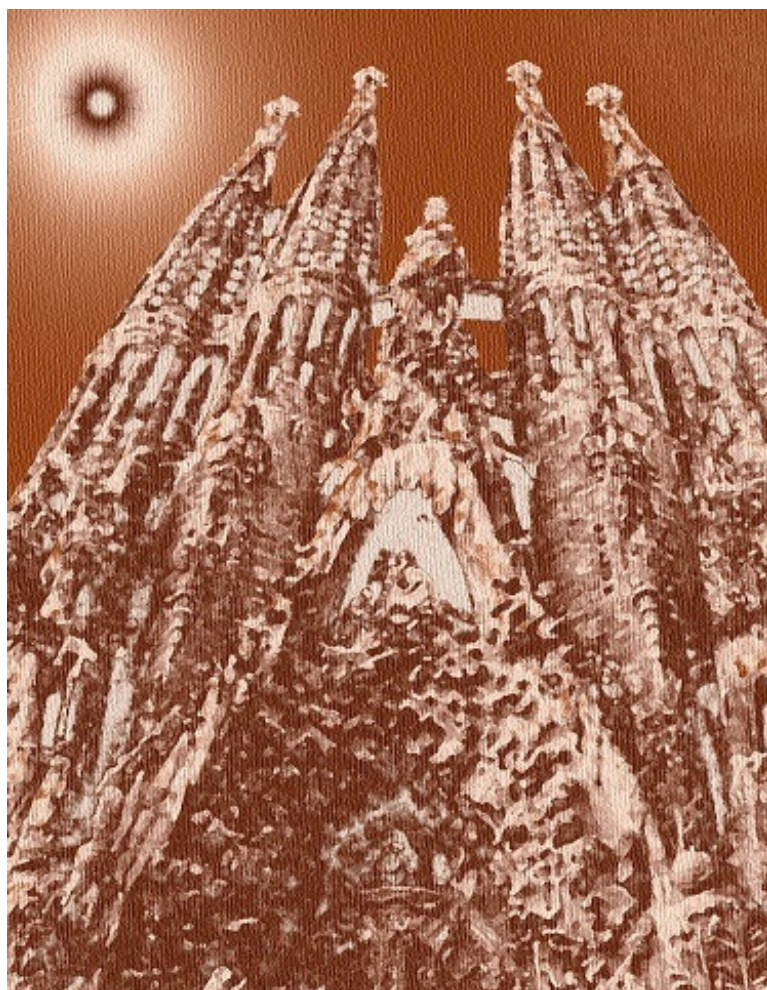
その手の技 知性の煌きに
形を与えられた 建築の上には
その目に触れた 生き物が遊び
形を失い 割れてしまった皿さえも
魂を呼び起こされた その上の色彩

すべては その言葉に
従順に 従ったまま
やがては 天への祈りに向けられた

地中海に 雲間から
静かに降りる 光のカテドラルよりも
人々の心を 強く空へ向けるものとして
大地の血筋から 芽吹いたものの力に

*

バルセロナでは建築家、ガウディーの作品に会えました。有名な聖家族教会やグエル公園を訪れたのですが、いずれも素晴らしいの一言。聖家族教会はスペイン行きの目的の一つでもあったので、感動したことに間違いはないのですが、グエル公園の可愛らしさもとても気に入りました。



ガウディーの作品は、彼の生きたカタルニャの建築技術の他に、イスラムの装飾性等の要素も混ざっています。バルセロナの前に訪ねたそれぞれの土地の営みが、ガウディーの血に受け継がれ、あの不思議な建築が生まれたのではと、そんな印象を持ちました。

ガウディー個人も、植物の形の研究などを建築に活かしています。グエル公園では割れたお皿の破片をタイルの代わりに色鮮やかに使うなど、常に新しい試みに貪欲だったようです。

エピローグ

エピローグ

世代を超えて血の中に伝えられるもの。ある人は文化と呼び、ある人は古臭い因習と呼ぶのかも知れません。それを、旅の途中、フラメンコを見てから意識し始めました。フラメンコの独特のリズム。とても僕に真似のできないものです。けれどジプシーの血脈は彼女たちの体にそのリズムを刻み、彼女たちは受け継がれてきた衝動を素直に手足で表現している。それでは僕の血に流れる、血脈は何だろうと、振り返りそんなことを考えていました。



旅はいつでも、何かしら新鮮な驚きを心に届けてくれます。この旅の風景も僕の中に溶け込み忘れ得ないものとして、例えばあちらこちらの詩の断片に顔を出すことでしょう。